



Title	日本の英語教育についてのインタビュー・ナラティブに見るポジショニング：日本人大学生英語学習者2名の事例をもとに
Author(s)	山本, 由実
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 42-51
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102264">https://doi.org/10.18910/102264</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 日本の英語教育についてのインタビュー・ナラティブに見るポジショニング —日本人大学生英語学習者 2 名の事例をもとに—

山本 由実

## 1. はじめに

本稿の目的は、日本人大学生英語学習者 2 名のインタビュー・ナラティブを事例とし、彼らが日本の英語教育について語る際のポジショニングに焦点を当て、その様相を明らかにすることである。本稿の研究協力者は英語学習の当事者ではあるが、英語教育について専門的な知識を有するわけではなく、日本の英語教育を語るということにおいてはノービスであると考えられる。このような研究協力者が、不意に日本の英語教育について尋ねられ、「日本の」という国家レベルの視点を必要とされる話題を扱う際には、その語りに、世間で流布している言説への依拠や自らが内包するマスターナラティブ<sup>1</sup>が表出されることが予想される。それら複数の声が組み込まれるであろう語りにおいて、動的に展開されるポジショニングを詳察する。また、ポジショニングに注目することで、インタビューという調査者との相互行為の中で研究協力者がどのように自らのアイデンティティを構築しているのかということも読み解いていく。

## 2. 研究の理論的背景とリサーチクエスチョン

本稿では、分析の方法論として、ポジショニング理論 (Hollway, 1984; Davies and Harré, 1990; Harré & Langenhove, 1999; Bamberg, 1997; 2004) を援用する。ポジショニングとは談話や会話における自己の立ち位置のことであり、これは固定的なものではなく、聞き手の影響を受け変化し得るものである。このポジショニング理論を分析ツールとして用いる利点は、個人やアイデンティティに関する問題だけでなく、文化的レベルにおける社会的問題や関心事に対しても同一の概念的枠組みを用いてアプローチできる点にある (Harré & Langenhove, 1999)。本稿では、インタビューの場で表出されるポジショニングを、相互行為の中で構築される可変的かつ動的なものとして捉える。また、その分析の射程を個人のレベルに留めず、その背後にある社会的問題にも広げて、分析を行なう。

分析対象とするデータは、英語にまつわるナラティブ研究の一環として行われたインタビューからの抜粋である。データ内では、筆者(調査者)が「日本の英語教育」について研究協力者の意見を求めているが、この話題は当日の話の流れで偶然出てきたもので、あらかじめ彼らに伝えられていた英語学習・使用経験についての質問項目ではなかった。そのため、研究協力者はこの問い合わせへの回答を前もって準備してはいなかったと予想できる。ここで彼らは一学習者としての意見を尋ねられてはいるが、「日本の英語教育」というトピックは、自分自身の体験談を述べるのとは異なる視点を必要とする。いわゆる専門家のような俯瞰的な視点からの発言が求められるような話題が、不意に調査者から提供されたと言える。

このような当事者の日本の英語教育についての即時的かつ即興的な語りはこれまで十分に注目されてこなかった。従来の英語学習当事者の声を扱った研究調査は、文部科学省をはじめとする

関連機関や研究者によるアンケート調査が中心となる。日本人大学生を対象とした比較的大規模な英語学習の実態調査としては大学 IR コンソーシアム(2020) の大学生活全般についての質問調査の一部や、大学英語教育の実態を把握することを目的としたベネッセ i-キャリア (2024) がある。また、大学単位での比較的小規模な調査としては、英語授業へのニーズを探ることを主な目的とした調査 (ペニントン, 2012; 牧野・平野, 2015; 藤田, 2020 ほか) がある。これらの質問紙調査で収集される結果は、集団全体の傾向を掴み、教育方針を策定する上で有効であるが、あらかじめ決められた質問や設問枠組みに外れる学習者の声は捨象されてしまう傾向がある。一方で、研究者などの専門家による日本の英語教育についての議論は、特に 2000 年以降に矢継ぎ早に行われた英語教育施策への批判から現行の制度についての多くの議論がなされている (大谷, 2007; 斎藤, 2007; 斎藤ほか, 2016; 久保田, 2018; 鳥飼, 2018; 寺沢, 2020; 下, 2022 ほか)。このように専門家が自ら積極的に意見を発信しているのに比べ、英語学習当事者の声は十分掘り下げて取り上げられてはこなかった。

こうした研究の知見を踏まえつつ、本稿では、質問紙調査で捉えきれない当事者の声に焦点を当て、そこから浮かび上がってくる実態を分析する。そのために、ここで二つのリサーチクエスチョンを設定する。まず、①英語学習の当事者である日本人大学生が日本の英語教育について語る際に、どのようなポジショニングをしながら語るのか、次に②彼らの語りに表出される英語の捉え方や社会的規範や価値観はどのようなものなのか、を明らかにする。これら二つのリサーチクエスチョンに答えることで、日本人大学生のアイデンティティ構築の一端を読み解いていく。

### 3. データの情報

本稿で扱うデータは、2021 年度より継続収集しているオンライン個別インタビューの日本人大学生 16 名の英語にまつわる語りのうち、2 名が日本の英語教育について語る部分を抜粋したものである(表 1)。インタビューはあらかじめ伝えられたいいくつかの質問と、話の流れでより詳しい内容や関連する事柄に話が及んだりするなど柔軟に行なわれる半構造化インタビューの形で行われた。研究協力の募集については、大学のオンラインプラットフォーム上の研究協力依頼に任意で回答してもらう形で協力を得た。2 名のインタビューはどちらも 2023 年 2 月にオンライン会議システム Zoom を用いて個別に行われ、それらの録音・録画からトランスクリプトを作成した。

表 1: データの情報

	仮名	学年	公立・私立の別	海外渡航歴	抜粋箇所/総時間
データ 1	あきと	大学 1 年生	小中(公立)、高(私立)	なし	40:46-44:46/50:51
データ 2	まこと	大学 2 年生	小中高(公立)	ハワイへ家族旅行	20:05-23:43/43:24

研究協力者 2 名は関西地方にある私立大学の外国語学部系以外の文系学部に所属している。それぞれ調査者の担当する授業を履修したことがあり、授業内外で会話も交わしているため、両者とも調査者とある程度のラポールは築けている状態である。2 名の共通点としては、英語を好意的に捉えていることと、志望する職業での英語使用の可能性が低いと認識している点が挙げられ

る。2名の英語学習にまつわるバックグラウンドを確認しておくと、データ1のあきと(大学1年生)は中学に上がるまで英語に触れた記憶がないと振り返り、留学経験もない。しかし高校で国際バカロレア(IB)のコースに入り、英語で授業を受けるようになったことで劇的に英語力が上がり、考え方の変容を得たことがデータ外で語られている。インタビュー当時の英語使用については、学生団体の仕事で海外の人と対面、及びオンラインで話すこともあると述べていた。データ2のまこと(大学2年生)が初めて英語に触れたのは小学校での授業で、あきとと同じく留学経験はないが、小学生の頃、家族でハワイ旅行に行った経験があると言う。また、普段の生活では英語で人とコミュニケーションを取る機会はないとのことだった。このように国内で小学校から高等学校までの教育を受けながらも、異なる英語学習環境にあった2名を研究対象とする。

分析においては、研究協力者が何を語るかを中心にしながら、どのように語るかということにも着目する。そのため、言語行為だけでなく非言語行為も分析の射程に入れ、マルチモーダルな視点も含めた分析を行なっていく。

## 4. 分析

### 4.1 英語を通した国際的な教育

データ1は、あきとが日本の英語教育について語る箇所である。データの前の部分では、大学での必修英語の単位取得後も英語関連の授業を履修したいということや、志望する職種に英語は必要ないが引き続き英語に関わり、さらに英語力向上を目指したいといったことが語られていた。そのような自分自身についての話が一通り終えられた後、調査者が、日本全体にとっての英語についてはどうに考えているのかと話題転換をして尋ねているのがデータ1である。

#### データ1

001. 調査者: なんか日本全体としてはどうですどう思いま↑す  
002. なんかもっと英語:やるべきだと思います↑か  
003. あきと: (1.0)あ:思いますね:(  
004. 調査者: @[@  
005. あきと: [¥ほんとに¥@  
006. 調査者: それは:あの:なんどういう目的でなんかいろいろあると思うけど  
007. 英語の(.)勉強しないといけないって言(.)まあ言った時に:  
008. まあいろんな方面のことがあると思うんだけど  
009. あきと: はい  
010. 調査者: どんな感じで思って↑る  
011. (2.0)  
012. あきと: ん:まあ(.)そうっすね一番やっぱそ重要なのが  
013. 英語の通した先にある考え方かなって自分は(1.5)思つ  
014. まあこれはバカロレアの教育の:方針というか(.)  
015. hバカロレアのスタイルがそんなんんですけど:  
016. やっぱ:(.)英語(.)英語圈って言ったらあれっすけど世界の方の(.)  
017. なんて言うんでしよう(2.5)なんか(2.0)  
018. ( )なんかいろんな視点から(.)こう考えたりとか:  
019. あの:(.)なんでしょう批判的に考えたりとか:  
020. こう(1.5)まあ(.)今(.)((上方に目線を向けながら))  
021. 多様性っていう言葉が広がってると思うんですけど(.)  
022. そういうった結構意識とか価値観が強いのって

023. 多分結構英語圏で(.)多いと思うので:
024. 調査者: °うん。
025. あきと: やっぱりそういった(.)考え方(2.5)ていうのは
026. やっぱり英語通したほうがより触れる機会が多くなると思いますし:
027. 調査者: ((細かく頷く))
028. あきと: そういう考え方の人が増えればいいかなあとは思うので:
029. (2.0)そうですまあ英語を(.)に(.)英語(.)教育っていうか
030. 英語を通した(.)そ(.)なんか(1.0)
031. 国際的な(.)教育が進めばいいかなと思いますね
032. 調査者: う:んうんうんうん(.)できる(.)と思います↑か(.)
033. @¥できると思いますかって変¥@
034. あきと: ん:(唇を一文字に結んで)まあでもやっぱ(.)そうですね:
035. これからの時代結構必要とかっていう話も(.)多分され(.)
036. ここ(.)なんて言うんでしょう
037. 近年(.)こう(.)グローバル化とかいって騒がれてるとは思うんですけど:
038. でもやっぱり結局:(.)必要な人は必要ですし
039. 必要じゃない人は多分必要じゃないっていうか:
040. 調査者: う:ん
041. あきと: 別に一生英語と:(.)関わらなくても:(.)
042. あの:生きてく入って(.)まあいると思いますし:
043. (2.5)そういうひ人も一定数もちろんいるわけで:(.)
044. 別にそうすねなんか(2.5)う:ん(.)強制的にこう(.)
045. 英語を(.)なんか(.)公用語にするぐらいまで(.)しろとは
046. 全く思わないんですけど:
047. 調査者: う:ん
048. (2.0)
049. あきと: でもまあ多分(.)ほんとに(.)グローバル化とかでこう(.)
050. 世界への興味っていうのはすごい今いきやすい((両手を交互に振り出しながら))
051. 時代だと思うんで日本国内にいても
052. 調査者: う:ん
053. (1.0)
054. あきと: そういう興味を持った人が英語を学びやすいっていうか(.)
055. 英語を(.)習得しやすい環境(2.0)を(.)作ることは
056. 大事なんじゃないかなと思いますね
057. 調査者: う:んうんうんうんうん(.)そうですね

あきとの語りからは、彼が理想とする IB 教育の思想と英語とが分かれ難く結びついていることがわかる。彼は語りの中で頻繁に間をとりながら、自分の受けた教育を思い出すようにして、IB がどのようなものなのか少しづつ説明を加えながら調査者の質問に回答していく。

001-002 行目で調査者が日本全体としては英語を勉強するべきだと思うかという問い合わせると、あきとは1秒間ほどの間をおいて、「あ:思いますね:」(003 行目)と答え、笑顔を見せる。これに調査者も笑いで応じ、その目的を尋ねると、2秒の間の後、「英語の通した先にある考え方」(013 行目)と、英語教育することによって得られる IB の考え方方が大変重要であると述べる。その IB の考え方とは、多角的な視点から・批判的に考えること、多様性の意識や価値観であるとし、これらは基本的に英語を通して学ぶものであり、このような「国際的な(.)教育」(030 行目)が進めばよいと言う。

この IB と英語の関係についての語りに注目してみると、このような IB の基本方針は「英語(.)

英語圈って言ったらあれっすけど世界の方の(.)」(016 行目)、「英語圏で(.)多い」(023 行目)ものであり、その身につけ方としては、「英語通したほうがより触れる機会が多くなる」(026 行目)、「英語を(.)に(.)英語(.)教育っていうか英語を通した(.)そ(.)なんか(1.0)国際的な(.)教育が進めばいいかな」(029-031 行目)と英語との関わりが繰り返し言及される。

続く箇所で、調査者はあきとが述べる理想について日本社会で実現できそうかと尋ねる(031 行目)が、その後即座に「@¥できると思いますかって変¥@」(033 行目)と直前の自分の質問を茶化すような笑いと笑いながらの発話を付け加える。これは、直接的で敵対的とも取られかねない先の質問を和らげ、相手の発言を促すものであると考えられる。それに対し、あきとはすぐに「ん:」(034 行目)と唇を真一文字に結んで考える様子を見せ、「まあでもやっぱ(.)そうっすね:」(034 行目)とフィラー的な発話を挟み、できるかできないかという回答でなく、英語が必要でない人が一定数いる可能性に触れ、全員に強制することではないと言う。その上で、今の日本の状況について「グローバル化」(049 行目)によって「世界への興味」(50 行目)が喚起され人々が外に関心を向けやすくなっていると手を前に振り出すジェスチャーを交えて外に飛び出していくようなイメージと共に語り、そのような関心を持った人が英語を学べる環境が整備されるとよいと述べる。

#### 4.2 単にカリキュラムとして入れてるだけ

データ 2 は、まことが日本の英語教育について語る箇所を扱う。本データの前で彼は、将来就きたい職の業務に英語は必要ないが、就職活動のために TOEIC のスコアが必要であれば受験すると述べていた。また、春休み中であったインタビュー時には、たまに洋楽を聞いたり英語の YouTube を字幕ありで見たりするだけだと自身の英語使用について説明した。

##### データ 2

001. 調査者: 日本(.)全体¥としてはどうだと思いますか¥  
002. ¥英語¥[( . )と思いま↑す  
003. まこと: [あ:はい  
004. 圧倒的に遅れてるなって思いますねやっぱり  
005. 調査者: う:ん  
006. まこと: 自分もできないながらも:  
007. やっぱり政府が(.)ま国民倍増計画って謳って国民:の所得が増えたように:  
008. やっぱり:(.)政府も:  
009. じゃみんな英語話せるようになりましょうって言って:  
010. 調査者: ((2回頷く))  
011. まこと: でちゃんと:(.)英語が話せるようになったらいいなと思ったんですけど  
012. 別にそういう:(.)プロパガンダとかも<なかった(.)>ですし:  
013. ただ単に:英語をカリキュラムとして入れてるだけみたいな(.)[感じで:  
014. 調査者: [(2回頷く))  
015. まこと: ま 8割ぐらいが本当は英語話せたら日本人の  
016. 話したらいいのかなっていうのは(.)今後思ふんですけど:  
017. 調査者: う:ん ((数回頷く)) うんうんうんうん  
018. へ:8割ぐらいの人が英語(.)ま:<話せ>たり  
019. 仕事で使えるぐら↑い(.)になったとして  
020. まこと: ((頷く))  
021. 調査者: そしたらなんかどんなふうになると思います↑か  
022. (1.0)

023. まこと：まやっぱり外国人労働者とかも働きや<すい>し：
024. 調査者：う：ん
025. まこと：あと調べたら：その：海外の：旅行先：↑ん(.)
026. かい外国人が：日本に来て：困った(1.0)理↑由[(.)のランキングで：
027. 調査者： [(数回頷く)]
028. まこと：確か2位が：ま英語が喋れない(.)日本人が英語：会話が通じないみたいな：
029. 調査者：°う：ん°
030. まこと：あったんでやっぱりそこがやっぱりネックになって：
031. ま日本が観光：国になれてないのかなっていうのが(.)
032. 調査者：う：ん
033. まこと：感じるはい
034. 調査者：ん：：そうですね：
035. まこと：((数回頷く))
036. 調査者：それなんかテクノロジーとかで補えると思います↑か(.)@
037. まこと：あ：：えつ：と：(2.0)ま多分最近は
038. 多分ま結構<補えてるとは思うんですけど>：
039. 調査者：うん
040. (4.0)
041. まこと：でも大事ななんか：(2.0)例えればチェックインとかは
042. そういうなんか(.)結構(.)テクノロジーとか対策されてるじゃないですか
043. 結構なんか[(.)英語話せる人がホテルマンにいたりとか：
044. 調査者： [う：ん]
045. まこと：で観光で：やっぱりなんか(1.0)
046. その自分の体験談で(.)体験談なんんですけど：(2.0)
047. ただ写真撮ってって外国人に言われて：
048. 調査者：うん
049. まこと：で：オッケーオッケーって言わ(.)
050. で写真撮って：((カメラを構える仕草をしながら))
051. でサンキューって言った後に：
052. なんで(.)なんて返したらいいんだろうって思って
052. ゆ本当はユアウェルカムなんですけど：
053. オッケーオッケーって言って結局(1.5)もうオッケーしか言ってないんで
054. 結構大学とかで：勉強したはずなのに：ユアウェルカムとかが
055. と(.)咄嗟に出てこない(.)っていうのが考えると：(2.5)
056. やっぱりそういう面で会話：とかでなんか：(.)
057. 困ってるのかなって思いますね
058. 調査者：う：んうんうんうんうん(.)そうですね：

まことは日本人の英語について、「圧倒的に遅れてるな」(004行目)と一蹴し、それを政府が対処すべき問題だとしている。「国民倍増計画って謳って国民：の所得が増えたように：」(007行目)と1960年代に池田勇人内閣が実行した「所得倍増計画」を例として挙げ、池田内閣が日本国民の所得を倍増させたように、今の政府も国民の英語力向上のための施策を主導してほしかったという意見が示されている。そして、今の政府のやり方は「プロパガンダ<sup>ii</sup>」(012行目)もなく、「英語をカリキュラムに入れてるだけみたいな」(013行目)と、不徹底で形ばかりの状態であると否定的な評価を下す。つまり、まことは、英語教育は政府が責任を負うべき問題であり、それが遂行されていないために日本の英語教育が効果を上げていないと考えていることが窺える。

続いてまことは、今後の目標として日本人の8割ほどが英語を話せたらいいと語り、そのよう

な社会の利点として、「外国人労働者とともに働きやすい」(023行目)点と外国人観光客との意思疎通がスムーズになることで観光立国になれるという点を挙げる。ここで、まことの「外国人労働者」像が「英語で意思疎通を図れる人々」であることは、注目に値する。実際には、日本で働く外国人労働者の多くは非英語圏から来ており、英語では意思疎通の図れない者も多い<sup>iii</sup>。さらに彼らは外国人観光客についても英語話者を想定している。英語が外国人との共通の言語であるというのは国の教育政策(文部科学省, 2003 ほか)や学習指導要領、それに準拠する教科書でも明示的・非明示的に繰り返し示されることであるが、まことも英語中心の価値観を内面化していると言える。

続いて 036 行目では、観光の話に関連して調査者が、外国人観光客が日本で直面する言語の問題をテクノロジーが解決できるか尋ねている。まことは一部、既にテクノロジーが利用されているとしながらも、自らの体験談を引き合いに出し、日本人にとって英語でのコミュニケーションは依然として難しいのではないかと感じたことを説明している。ここで持ち出される体験は、外国人観光客に写真撮影を頼まれたというエピソードである。カメラを構えるジェスチャーを交え語られるそのエピソードは、撮影はできたため相手の目的は達成されており意思疎通ができているが、その質が問題視されている。外国人観光客に感謝の言葉を言われた際に「オッケー オッケーって言って結局(1.5)もうオッケーしか言ってないんで」(053 行目)と学んでいるはずの他の表現が咄嗟に出てこなかつたことを、残念なこととして語る。その上で、「やっぱりそういう面で会話:とかでなんか:(.)困ってるのかなって思いますね」(056-057 行目)と、自分の体験を他の日本人も同じように体験することとして一般化し、外国人観光客が日本人と英語でコミュニケーションが取れない状況があるのだろうと推測している。

## 5. 考察

ここまで日本人大学生 2 名の語りの分析を終えたところで、改めてリサーチクエスチョンを確認しながら考察に入る。まず、①英語学習の当事者である日本人大学生が日本の英語教育について語る際に、どのようなポジショニングをしながら語るのか、については、データ 1 のあきと、データ 2 のまことの両者とも、まずは日本全体を見渡すメタ的なポジショニングから、英語教育をより推し進めるべきという意見を表明した。その後、あきとは、IB という国際的な教育プログラムの体験者として自己を位置付けながらその教育を理想の形として挙げ、英語を通して批判的な思考や多様性を認める意識や価値観を涵養すべきであるとした。まことは、政府主導の英語教育政策が十分でないことを過去の経済政策と比較しながらメタ的なポジショニングから指摘した後、外国人観光客とのやりとりを実際に体験した者として、英語教育施策の不徹底を指摘する。両者はさらに、英語教育を促進すべきとする立場を取りながらも、それが日本人に一律に求められるべきではないと英語を必要としない人にも配慮を見せ、自分の立場を超えて社会全体を見渡すメタ的なポジショニングから語っていた。あきととまことは、メタ的なポジショニングと英語にまつわる体験を持つ者としてのポジショニングを行き来しながら、英語教育を国レベルで推し進めるべきという立場を支持する語りを展開していたことが明らかになった。

次に②彼らの語りに表出される英語の捉え方や社会的規範や価値観はどのようなものなのか、については、あきとの語りからは、IB=欧米と高い関連のあるものとし、その思想をより優れた

目指すべき姿として掲げ、それは「英語」を通して学ぶことができるものだという、英語をよりよい自己実現や社会実現のために必須のものと見る価値観が見られた。実際には IB はスイスで始まっており、その使用言語は英語のみに限らない。しかし、彼が日本の高校で受けた IB 教育は英語で行われていたことから、IB 教育は彼の中で英語と強く結びついているのだと言える。

次にまことの語りを振り返ってみると、英語は国策として政府が牽引していくべき事案であることが明示的に示されており、日本人の英語力の低さは政府が教育に責任を持って取り組んでいないことに起因すると感じていることが窺えた。さらに、英語は「外国人」と意思疎通を図る際に使うものとして捉えられているが、その「外国人」は多様なバックグラウンドを持った外国人ではなく、文部科学省が繰り返し掲げるよう 「英語が使えたたら世界中の人と意思疎通が図れる」という世界観における「英語が話せる外国人」像である。この意味で、政府の方針や世間で喧伝されるリンガ・フランカとしての英語の重要性が内面化され、語りに表出していたと言える。必ずしも実態を表してはいないのにもかかわらず英語教育の文脈においては、英語=国際語、英語=リンガ・フランカという強い結びつきを示す言説が再生産されていることは先行研究でも指摘されている(Pennycook, 2007; 久保田, 2015 ほか)。今回の 2 名の研究協力者は自身の体験を拠り所にしながらも、英語、及び英語教育が必要というマスターナラティブを再構築していた。

## 6. まとめ

本稿は、将来仕事場面で英語使用を想定していない日本人大学生英語学習者が、そのような状況にもかかわらず英語教育推進の立場を取り、自分の経験を軸に語りを展開していく様子をポジショニングを鍵に分析した。彼らの語りを振り返ると、あきとは高校で強烈な影響を受けた IB 教育での英語を通じた国際教育をよいものとし、それを自らと深く関連するものとして自らのアイデンティティを構築している様子が見られた。一方、まことは外国人観光客とのやりとりで自身の英語表現の乏しさを実感した経験を通じて、日本人にとって英語は依然として難しいものだと捉えると同時に、その背景に政府の英語教育の不徹底があると示唆していた。彼の姿勢は政府の責任を指摘しつつも自らの問題として強く捉えようとはしていない無責任ともとれる姿勢が見られ、英語使用に対する一定の距離感を持つ者としてのアイデンティティが読み取れた。

このような、個々の違いはあるが英語教育推進を支持する語りは、日本政府が喧伝する「グローバル時代には英語が必須である」というマスターナラティブを内包した結果とも言える。加えてその英語レベルは単に意思疎通が図れるだけでなく、データ 2 のまことの語りからわかるように、より高次の英語力が想定されている。ただ、2 名は、現在の英語教育が十分ではないしながらも非難しているわけではなく、結果的にやんわりと今の状況がベストではないことを指摘するにとどまっている。これは、現代日本社会において英語が必ずしも日常的・職業的に必要とされていないという感覚を研究協力者が持っていること、さらに彼ら自身が英語で不利益を被った経験がなく、むしろ受験等において英語のスコアが有利に働いたという成功経験を有していることが背景にあると考えられる。このような英語への好意的な見方と緩やかな繋がりの感覚は、山本(2022; 2025) で論じられた研究協力者のシニア女性や大学生とも共通するものである。今後もさらに事例研究を進め、英語が日本人英語学習者の考え方や価値観、アイデンティティにどのように

に影響を及ぼしているのか検証していきたい。

## 参考文献

- Andrews, Molly (2004). Opening to the original contributions: Counter-narratives and the power to oppose. In M. Bamberg, & M. Andrews (Eds.), *Considering counter-narratives: Narrating, resisting, making sense*, pp.1-6. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Bamberg, Michael (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1-4), 335-342.
- Bamberg, Michael (2004). Form and functions of 'slut bashing' in male identity constructions in 15-year-olds. *Human Development*, 47(6), 331-353.
- ベネッセ i-キャリア (2024). 「大学生の英語学習意識について」に関する調査.  
[https://www.benesse-i-career.co.jp/news/20240404\\_1release.pdf](https://www.benesse-i-career.co.jp/news/20240404_1release.pdf)
- 文化審議会国語分科会 (2022). 地域における日本語教育の在り方について(報告).  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashikingikai/kokugo/hokoku/pdf/93798801\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashikingikai/kokugo/hokoku/pdf/93798801_01.pdf)
- 大学IRコンソーシアム (2020). 「一年生調査2019年」「上級生調査2019年」基礎集計結果. 2020.10.23  
[https://irnw.jp/images/home/HP%E7%94%A8\\_%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E9%9B%86%E8%A8%882019\\_20201023%E6%94%B9%E8%A8%82.pdf](https://irnw.jp/images/home/HP%E7%94%A8_%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E9%9B%86%E8%A8%882019_20201023%E6%94%B9%E8%A8%82.pdf)
- Davies, Bronwyn, & Harré, Rom (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 20(1), 43-63.
- 藤田恵里子 (2020). 非英語専攻学習者の英語学習に対する意識調査. 江戸川大学紀要, 30, 507-515.
- Harre, Rom, & Langenhove, van, Luk (Eds.) (1999). *Positioning theory*. London: Sage.
- 波多野一真 (2019). 人間主義経営の視点から見る外国人労働者の言語問題. 創価経営論集, 43(2), 45-54.
- Hollway, Wendy (1984). Gender difference and the production of subjectivity. In J. Henrique, & W. Hollway, & C. Urwin, & C. Venn, & V. Walkerdine (Eds.) *Changing the subject: Psychology, social regulation, and subjectivity*, pp.227-263. London: Routledge.
- 久保田竜子 (2015). グローバル化社会と言語教育：クリティカルな視点から. くろしお出版.
- 久保田竜子 (2018). 英語教育幻想. ちくま新書.
- 牧野眞貴・平野順也 (2015). 英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査. 教養・外国語教育センター紀要 外国語編, 6(1), 39-55.
- 文部科学省 (2003). 「英語ができる日本人」育成のための行動計画. 2003.3.31. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/04031601/005.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/04031601/005.pdf)
- 大谷泰照 (2007). 日本人にとって英語とは何か：異文化理解のあり方を問う. 大修館書店.
- Pennycook, Alastair (2007). The Myth of English as an international language. In S. Makoni, & A. Pennycook (Eds.), *Disinventing and Reconstituting Languages*, 90-115. London:

Multilingual Matters Ltd.

ペニントン和雅子(2012). 学習者が大学で「英語」を学習する目的意識の調査報告. 西南学院大学言語教育センター紀要, 2, 3-19.

厚生労働省 (2023). 「外国人雇用状況」の届出状況表一覧 (令和4年10月末現在)

<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001044544.pdf>

斎藤兆史 (2007). 日本人と英語：もうひとつの英語 100 年史. 研究社.

斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・野村昌司 (2016). 「グローバル人材育成」の英語教育を問う. ひつじ書房.

千頭聰・祖父江カースティ (2019). 外国人雇用の実態と地域教師会に向けての日本語教育の課題. 知多半島の歴史と現在, 23, 37-55.

下絵津子 (2022). 多言語教育に揺れる近代日本：「一外国語主義」浸透の歴史. 東信堂.

寺沢拓敬 (2020). 小学校英語のジレンマ. 岩波新書.

鳥飼玖美子 (2018). 英語教育の危機. ちくま新書.

山本由実 (2022). シニア世代の英語学習・英語使用についてのナラティブ分析—70代女性の語りに表出されるアイデンティティー. 立命館言語文化研究, 33(3), 303-321.

山本由実 (2025). 日本人英語学習者の英語のイメージをめぐるナラティブ分析—留学経験のない大学生英語学習者の語りより一. 社会言語科学, 27(2), 19-34.

### トランスクリプト記号

(.)	1.0 秒以下の沈黙	(1.0)	数字の秒数の沈黙
:	長音	::	長めの長音
@	笑い	¥-¥	笑いながらの発話
[	オーバーラップが始まる箇所	=	続けて聞こえる発話
<-->	周囲よりも遅い発話	°--°	周囲よりも小さい声の発話
↑	音の上昇	( )	発話の内容が聞き取れない箇所
(( ))	非言語行動の説明		

<sup>i</sup> Andrews (2004) は、マスターナラティブ(master narratives)は人々に規範を示すもので、人々はその規範に則って自身や他人の経験を理解するという。また、マスターナラティブは人々に内面化され、意識的／無意識的に再生産される。

<sup>ii</sup> ここで「プロパガンダ」とは政策を強く推し進める方策といったような意味だと考えられる。

<sup>iii</sup> 厚生労働省 (2023) によると、日本で働く外国人労働者の出身国上位 3 カ国は上から順にベトナム (25.4%)、中国(21.2%)、フィリピン(11.3%)と約半数に上る。これらの外国人労働者は日本語・英語での意思疎通が難しく、日本語教育支援が必要なことが先行研究で論じられている (波多野, 2019; 千頭・祖父江, 2019)。文化庁も東南アジアからの在留外国人の増加傾向に対応し、日本語教育を中心に「生活者としての外国人」の支援を各自治体に要請している (文化審議会国語分科会, 2022)。